

私はソーシャルワーカー

長崎ウエスレヤン大学 社会福祉学科

講師 関 浩一

私は福祉にはまったく興味のない人間でした。街で、障がい者を見かけても、視野にその存在が入っても、意識が向かうことはまずありませんでした。それが、今や、社会福祉学科の教員をやっていますから、人生とは不思議なものです。

私は、福祉に興味をもつというよりも、もたざるをえない状況に追い込まれました。20年前、交通事故で頸髄を損傷し、四肢麻痺となった私は、車イス生活を余儀なくされました。まさか、自分が障がい者になろうとは夢にも思っておりませんでした。

体が不自由になったことは、それはそれで大変だったのですが、それよりも、自分が障がい者と呼ばれる存在になったことへのショックのほうが大きかったです。車いすは歩けないものにとっては、その歩行を助ける便利な道具であると同時に、スティグマのシンボルをも意味します。自分がマイノリティであることを顕著にあらわす乗り物です。その乗り物で、街に出ることは、人々の視線の矢に打ち抜かれること余儀なくされます。

私にとって、ありがたかったのは、当時の友人たちでした。横に立ってくれるだけでどれほど心強かったか知れません。友人の存在は、まるで、降り注ぐ矢から身を守ってくれる強固な盾のようでした。

機会があり、ほどなく、私はアメリカに留学することになりました。そこでは、多くのマイノリティと接しました。障がい者はもちろん、ヒスパニック系アメリカ人などの民族的マイノリティ、セクシャルマイノリティ、彼らは差別や偏見と戦いながら、みずから権利を勝ち取ろうとチャレンジしてきました。社会のなかで、そこにいるのが当たり前のように、堂々と振る舞う彼らがとても眩しく映りました。いっぼうで、それほど肩肘張って生きているわけでもなく、マジョリティやマイノリティ関係なく、仲間たちとブラックジョークを言いながら、ハンバーガーを頬張っている光景がとても自然で、印象に残っています。

私は、アメリカでの生活の中で、自分が障がい者であることを忘れてしまっている瞬間がよくありました。障がい者としての存在をあまり意識しなくなりました。日本にいるときには、世の中には、障害者と健常者の2種類の人間しかいないと思っていましたが、今では、世界には、もっとたくさんの種類の人間が存在することを知っています。その誰もが、大なり小なりのマイノリティを抱え、それが時と場合によって、際立って見えるだけのこと。また、逆のマジョリティの立場になる可能性もあることがわかりました。

私は、障がい者になって得たものがたくさんあります。それは、多くのマイノリティと接する機会が増えたことです。彼らとの交流により、私の人生はより豊かになりました。また、明日が予測できない世界に住んでいることを痛感したため、日々の生活を大切にできるようになり、後悔しない生き方を選ぶようになりました。

私は、自分の体験がきっかけとなり、トラウマの研究を行っています。トラウマ研究は、これまで傷という側面から視点が当てられ、その傷からいかに回復するかという点に力が注がれてきました。いっぽうで、その傷を受けたトラウマの体験から、ときに人が成長を遂げることがあります。それは、ポストトラウマチック・グロースと呼ばれています。ポストトラウマティック・グロースとは、トラウマの出来事から、もがき苦しむことを通してポジティブな変容を遂げることです。トラウマの体験をした人が、その体験を契機として、他者への思いやりの気持ちをもつようになり、これまでにはない関心が芽生え、新しい道が拓けたり、困難な出来事にも対処できる強さを身につけたり、一日一日の生活に感謝するようになることがあります。自然災害、戦争、事故、病気、虐待、喪失など、さまざまなトラウマ体験者に、このようなポジティブな変容が報告されています。

私は、これまで様々なトラウマ体験をされた方にお会いし、トラウマ体験からのポジティブな変容をお尋ねしてきました。

雲仙普賢岳噴火災害による火砕流や土石流被害で、家を失った被災者の一人は、被災生活の体験を通して「この先何があってもやっていける自信がついた」と胸を張って語っていました。

タイのHIVに感染した男性も、以前は自分のことしか考えていなかったが、差別や偏見を受けてきた体験から、「エイズで両親に先立たれた遺児がかかえる問題を何とかしたい」と思い、現在、NGOでエイズ遺児のための支援活動に携わっていました。

えひめ丸の沈没事故に遭遇した、当時、高校生だった青年は、事故により9名の仲間や恩師を失いました。その体験から「いのちの大切さ」を実感しながら生きていました。

事故で障害を負った女性は、「多分長生きはできないんだから、今のうちにできることは、やっとなかないといけないと。思ったことは、迷っていることはするべきだね」と語っていました。

たいへんイキイキとした表情で、これを語っておられました。今もなお、苦しみを抱えながら、暮らしている人も少なくありませんでした。根強い差別を受けているHIV感性した男性、友を亡くした喪失に苦しむえひめ丸事故の生還男性、社会で活躍する場が限られている障がい者の女性、研究では、ポジティブな変容と苦悩は共存する関係であることがわかっています。ポジティブな変容を遂げたからといって、すべての苦悩が拭い去れるわけではありません。

ここに、ソーシャルワーカーが果たす役割があるように思います。認知症患者の家族、障がい児の母、アルコール依存など、ソーシャルワーカーは人生の危機に直面した人に接します。こうした方々のポストトラウマティック・グロースをより促すために、肩を並べて

歩みつつ、前途に立ちふさがる障壁を取り払いながら、新たな可能性をひらくお手伝いをする役割です。

ソーシャルワーカーは、利用者の苦しみが直接伝わり、みずからも燃えつきそうになりながらも、それに付き合っていくと、いつの日か、利用者の成長を目の当たりにすることがあります。利用者の成長は、ソーシャルワーカーにも伝染し、ともに、成長することができます。

ポストトラウマチック・グロースとは、例えるなら、トラウマという真っ暗闇に灯るかすかな光です。それが、かすかな光であれ、希望につながる灯火であると考えています。ソーシャルワーカーの特徴は、ストレングスに焦点を当ててエンパワメントを促すことです。私はソーシャルワーカーでありたい。この研究が、人生の危機に直面したすべての人の、エンパワメントになることを願いながら。